

文教厚生委員会会議録（要点筆記）

令和 6 年 8 月 8 日（木）
午前 10 時 00 分開会
場所：委員会室

○中村和也委員長

ただ今から、文教厚生委員会を開催します。協議題 1、閉会中の調査事項についての（1）市内視察についてを議題とします。7月に行いました市内視察について、皆さまから報告書を事前にいただいておりますので、順にそのご意見について、ご説明、ご提言等をお願いします。初めに、7月5日の市内視察の報告書について共有を行います。

○有留麻由委員

社会福祉協議会は、経験豊かなセンター長の具体例などを聞くことができ、イメージがわきやすく、仕組みが足りない部分と、足りているが届かない部分があるように感じました。「ふくし相談窓口」はまだ、あまり知られていないのか、相談が少ないとの話がありました。情報が届くようにどのように工夫するのも課題だと感じました。相談する側は、相談の仕方が分からない。または、こんなことで相談していいのかなどの気持ちがあるように思います。中高生は特にプライドもあるので、さらに相談しにくいことが想像できます。気軽に相談できる取り組みなど、行政側からの働きかけが必要だと思いました。Stay Aliveは、「すでに支援する仕組みはたくさんあるのではないか」という問題提起には、現場の目線を知ることができました。

社会福祉協議会でも、Stay Aliveでも「支援者の支援」が話題に上がっていました。中高生の第3の居場所はハード面も大事ですが、それ以上にソフト面の大事さも感じました。

○芳金秀展委員

社会福祉協議会は、インクルーシブな地域づくり、多様な価値観を持った大人と出会える場、保護者含め一人で抱え込まない仕組み、中高生の自分探しの場所が必要だと感じました。子どもたちの価値観や生活様式、家庭環境が多様化しており、今後型にはめていくことは難しい中で、多様な主体を多様な受け皿で支える必要があることがよくわかりました。実践されている方の話は非常に役に立ちました。若者のどんな課題を解決するための居場所支援なのかをはっきりさせないと不必要な施設になりかねません。また、つなぐという機能はやはり人にしかできないので、Stay Aliveの石川氏のような方に力を借りることも必要だと思いました。

○鈴木英華委員

子どもが抱える問題を吐き出せて相談できる場所が必要であるということを、課題や事例を聞いて感じました。また、その場所はいくつか必要であると分かりました。中高生の居場所が必要であり、趣味嗜好で集まれる場所の提供が重要だと知りました。支援する人への支援が必要であることも分かりました。居場所がなくさまよう子どもには、まずは大人たちが連携をとり、その子どものことを複数人が認識して守ることが求められます。

○鈴木幸彦委員

子どもは簡単に困っていることが言えないケースが多いので、周りの大人が異変に気づいてあげられる目を持つことが重要です。歩いてでも行ける各地域の既存施設を活用することが大切で、拠点に来てほしいというアプローチでは子どもは集まらないと分かりました。自分に向き合ってくれるおせっかいな大人の存在が必要で、また、支援をする仕組みに対しての行政の支援が重要であると分かりました。

Stay Aliveでは、行政が考える支援、ボランティアの支援の入れどころを間違えてはいけないと思いました。当事者と心が通じた支援者との間に割り込んでパフォーマンス的に行政支援をするのではなく遠隔から支援施設へのサポートをすべきだと感じました。

○竹内功治委員

中高生の居場所づくりを公的施設で運営する場合、社会福祉協議会の協力が必要であると分かりました。Stay Aliveでは、生活支援や就労支援をしている団体、法人に対する市民への周知が足りていないと感じました。このような支援をしている団体同士の連携が少ないので、行政として協力する体制が必要だと思いました。

○間瀬恒幸子ども未来部長

社会福祉協議会では、発達障がい等を持つ可能性のある子どもの早期支援を行うための保護者理解、学童支援員に対する定期的な研修と、専門的なサポート体制の整備、地域や民間のリソースを活用した居場所の多様化と地域コミュニティとの連携強化、趣味や嗜好に基づくプログラムの拡充と中高生が集まりやすい居場所の提供が提案されました。

Stay Aliveでは、市内の全ての子どもの居場所をまとめたポータルサイトの設立と、定期的な情報更新、子どもや保護者が利用しやすい質問応答システムを導入しての、必要な支援や居場所の案内、子どもを支援する人とそのサポートを支援する体制の整備、公的機関や地域団体、民間企業との連携や、居場所の充実が提案されました。

○麻生七海副委員長

半田市では、子どもの居場所が不足している現状があります。場所のみ整備するのではなく、気軽に自然体で集える心温まる場所とすることが大事です。また、そこに頼れる大人がいて集った若者に声掛けし和ませる雰囲気づくりが必要です。既設の施設で言えば、瀧上工業雁宿ホールや新しく生まれ変わるJR半田駅高架下や知多半田駅前の中心市街地といった場所に居場所を作ったり、また地域別にも若者サロンのような居場所があると集いやすいと思われます。

Stay Aliveでは、サポートしている人のサポートも大事なことであったと学びました。居場所づくりについては、そこに行けば経験豊かな大人がいて安心して話しが聞けるといった居場所を若者は求めていると、これまで若者と向き合ってきた経験から語られていました。子どもの居場所づくりへの支援については、社会福祉協議会や学校も精一杯やっています。ただ手が届かないところに属する子どもが現実にいることも確かです。その部分については、社会的擁護の出番であると思いました。

○中村和也委員長

社会福祉協議会では、半田市の様々な課題に対する策として、家族以外の頼れる大人を市内で増やしていくこと、福祉と繋げられる専門家を増やしていくこと、様々な人と関われる場所である多様な場所を既存の場所に入れ込んでいき、場所を増やしていくこと、自然と気軽に集える場所を公的な場所に増やしていくことが必要だと思いました。小学生は、自分で歩いていける距離に第三の居場所が必要であり、中高生は趣味趣向で繋がれる場所が必要だと学びました。

Stay Aliveでは、既存の居場所を連携させる体制づくりや、インターネット上の居場所も必要だと分かりました。子どもの居場所、支援組織をつなげるプラットフォームが必要で、子ども達にとって必要な居場所としては、世代ごとに分けた場所、世代に関係なくごちゃ混ぜの居場所と様々な場所が必要だと分かりました。当事者だけでなく、支援者を支援する仕組みが必要だと学びました。

それでは、7月5日の視察について、皆さんの意見を聞いて、新たにご意見等ありましたらお願いします。

【「なし」との声あり。】

○中村和也委員長

次に、資料2の7月12日の市内視察の報告書について共有を行います。

○麻生七海副委員長

成岩児童センターについては、職員が少ない分、ボランティアの力をうまく借り、運営していると感じました。また幼い頃利用した子どもたちが中高生になっても居場所として利用できる仕組みが構築されていてよいと思いました。板山ふれあいセンターは、インクルーシブな取組みに関しても出来る範囲で対応し、半田支援学校との交流やふたば園が近いと思いました。

誰でも利用できるメリットとしては、異年齢のこども達が一緒に過ごし活動を共にすることができることで、学習広場の設置や食育も開催しており、今後はフリーWIFI、バンド室、たこ焼きなども提供もできるよう取り組むということで、さらに充実した施設になるのではないかと思います。子どもの生きる力をのばすネットワーク（のばす会）では、引きこもり状態から自立のきっかけとして担任の先生が代わった、交際相手が出来た等ちょっとした出来事から起こることを知りました。半田市では、のばす会への参加が出席扱いになるため、こどもの状況を学校に報告していることを知りました。のばす会にやってくるこども達にとっての魅力は、遊び道具・大富豪ゲーム・卓球や動物とのふれあいと共に第一に家族的な雰囲気にあると感じました。

○有留麻由委員

成岩児童センターは、職員の先生方は、中学生もうまく巻き込んでイベント等を行っているようですが、勉強ができなかったり、食事がとれなかったりするの、中高生にとっては制限が多いと感じ、中高生のサードプレイスとしては、低年齢との交流という面ではいいですが、同年齢との交流という面では適さないのではないかと感じました。

児童館の在り方として、地域の遊び場としては一番、身近であり、就園前の親子や地域の子ども同士の交流の場としては存続すべき場所である反面、時代のニーズに沿わない部分もあり、改善する必要があると感じました。

板山ふれあいセンターは、民間が行っているためか、公営よりも自由度が高く、職員の先生方のやりたいことへの思いも幅広く感じました。職員数も多いので、今後やれることも多いだろうと思いました。理事長やセンター長の思いや考え次第で、良くも悪くもなる所は注意しなくてはいけないと思います。子どもの活動が幅広いうえに無料で、すべての活動に参加できるところも素晴らしいと感じました。自由度が高く、職員の数も十分足りている環境であれば、工夫次第で中高年だけでなく、不登校の子どものサードプレイスになりえると感じました。のばす会は、経験が豊富な職員が大変な苦労もある中、楽しそうに子どもたちを受け入れている様子に感銘を受けました。無理に学校に戻そうとしていない姿勢も安心できると感じました。

○芳金秀展委員

成岩児童センターは、高校生ボランティアは学校への直接の働きかけもあるが、過去にこの施設を利用していた生徒が高校生となって戻ってくるケースが多く、巻き込みには、きっかけと継続性が必要であると感じました。逆に言うと、新しい施設を作っても、急に利用者は増えない、建てる前からの関係性作りが大切だと思いました。板山ふれあいセンターでは、高校生の居場所支援は必要だと感じているが、なかなか教育現場の手が届きにくく、また潜在的に引きこもりに気づくことも児童センターの機能であると思いました。中学生の居場所としたときには、飲食やWIFI環境の整備またバンドルームなど趣味の居場所が必要だと感じました。のばす会は、いつでも帰って来れるという安心感があり、子どもたちにとっては居場所に多様な選択肢があるということが大切だと感じました。

○鈴木英華委員

成岩児童センターは、小学生のときに来ていた子どもが大きくなり、中高生になって馴染みの場所をなつかしみにきて、そこから、さまざまなイベントにボランティアとして運営に参加できることでずっと携われるのが良いと思いました。職員が資格をもっているため、子どもの異変に気付きやすく、声をかけやすい点もポイントであると思いました。板山ふれあいセンターは、公民館と、こども園が隣接しているので見守りの目が届きやすいと思いました。地域の人など、子どもにとって家族以外の人との出会いづくりを大切にしており、青山中学校との連携でボランティアを募り、イベントのお手伝いをしてもらうことを機に、センターへ入り、知ってもらうきっかけを作っているところが参考になりました。子どもの価値観が多様化しつつあるため居場所のハードルを低くして、居たい、行きたい場所を選択できるといいと感じました。のばす会は、子どもたちに色々聞くことはせず、ゆるやかな時間を大切にしていることが安心できるポイントだと思います。子どもに寄り添える大人の存在は重要であると思いました。

○鈴木幸彦委員

成岩児童センターは、児童福祉法に縛られること、また公共施設のため、一度帰宅してから来館することや水分補給以外の飲食禁止、昼の間は休館など、「子どもの居場所」としては融通の利かない部分がありますが、地域の子どもたちにとって閉館時間まで安心して遊べる居場所として重要な施設でした。子どもたちを永く見てきた経験豊富な職員がいることで、ちょっとした異変にも気づくことができ、母親からの子育て相談の場としても有効な場でした。板山ふれあいセンターは、職員配置がしやすいスタッフの人数、催しの自由度等、民営の良さがうかがえました。中学生の居場所、というより「ちょっと手伝って」とあえて頼ることで、自発的な動きが見られるようで、頼られた中学生は満足感を持ち、次は仲間を連れて自然と大きな輪となるとのことでした。学校、家庭、塾と違った息の抜ける場が今の子には必要なのだと思いました。児童センターは、公設民設ともに、18歳までなら誰でもどうぞ、というわりには児童センターは小さい子の居場所というイメージが拭い去れませんが、居場所として有効だけにこの壁を突破させたいと感じました。のばす会は、ルールも無ければ強制もなく、学校に行けない子たちの居場所となっていると感じました。あのような居場所がもう少し地域に点在していると通いやすいとは思いますが、その一方でボランティアスタッフがそれだけ揃えられないだろうという心配、また、不登校の子にとって近くは知人や友人に会う可能性もあり、逆に嫌なのかもしれないと思いました。不登校の彼らにとっては居心地の良い居場所であり、それを100%肯定はしませんが、現実として学校へ復帰できる子がいるのだから有効な施設に間違いはないと思いました。

○竹内功治委員

成岩児童センターは、館長をはじめ、スタッフのやる気を感じました。中高生の来館はイベント時の手伝いの参加はありますが、普段はほとんどいないとのことでした。イベント時に手伝いに来る中高生は、小学生の頃の利用者が多いとのこと、つながりの重要性を感じました。

板山ふれあいセンターは、民間運営のため、公営と比べてイベント等が行いやすいとのこと、地元と密着したイベントを企画されていました。のばす会は、長い経験からなのか、生徒との関係が絶妙な印象を受けました。セーフティーネットとして、市民へさらに周知が必要だと感じました。

○間瀬恒幸子ども未来部長

宮池小学校と成岩小学校の小学生が、成岩児童センターで交流しており、交流により、異なる校区の子どもたち同士が友達になり、地域の結びつきが強化されると感じています。子どもたちは自分で遊びを選ぶことができる環境が整っており、主体性を育む場となっています。小学生の頃から児童センターを利用していた子どもたちは、中高生になっても居場所として利用しやすくなっています。児童厚生員は、子どもたちに共感することを大切にしており、一人ひとりの子どもに寄り添った支援を行っています。

○中村和也委員長

成岩児童センターは、こどもの居場所づくりに関する指針で示されている「つなぐ」という取り組みを熱心に行っており、子どもたちと居場所を繋ぎ、来てもらうための企画や努力の結果、小学校で繋がっていた子どもたちが中学生や高校生になっても来てくれることがあるため、児童センターから積極的に声をかけることが大切であることを学びました。ボランティアスタッフとしてではなく、自然と集まれる場所が他に必要だと思いました。保護者や子ども達の相談窓口として機能していると思いました。板山ふれあいセンターは、民間で運営していることで、自由度が高くスタッフ配置も充実しているように感じました。民間運営によるデメリットとしては公的機関・福祉的機関との連携が公営と比べて弱いように感じました。中高生の居場所として、各地域にある公民館を活用していくことも一つであり。現在は、公民館は高齢者が利用する場所というイメージが強ですが、Wi-Fiやカラオケ、音楽やダンスなどのスタジオ設備の整備も一つだと思うとアドバイスいただけたのは参考になりました。のばす会は、困ったときに気軽に来られる場所を従前から作っておく必要があり、その為にイベントなども行っているとのことでした。不登校になった理由を聞かないということがポイントで、様子から読み解いていくという活動は印象的でした。その為には、大人の知識・経験が必要だと感じました。

それでは、皆さんの意見を聞いて、新たにご意見等ありましたらお願いします。

【「なし」との声あり。】

○中村和也委員長

本日いただいた意見は、委員会報告作成の際に反映させていただきます。よろしくお願いします。

【「なし」との声あり。】

○中村和也委員長

次に（２）県外視察についてを行います。資料３のとおり視察先を調整いたしました。概ねこの日程で進めさせていただきたいと思いますが、３日目のアダチベースについては、受入れ可能との回答はいただいておりますが、時間については調整中です。このことについて、何かご不明な点や、ご意見等ありますでしょうか。

【「なし」との声あり。】

○中村和也委員長

それでは、このように進めさせていただきます。

次に、（３）勉強会についてを行います。こどもの居場所づくりについて、勉強会を開催したいと考えており、日程調整をさせていただきました。１０月８日（火）１０時００分～１２時００分、１０月１１日（金）１３時３０分～１５時３０分、１０月１８日（金）１０時００分～１２時００分、１０月１８日（金）１３時３０分～１５時３０分、以上の日程を候補日として、勉強会の講師を調整したいと思います。また、勉強会を行うにあたり、講師謝金が必要となります。講師謝金の出どころとして、皆様で政務活動費を出し合って支払いできたらと考えています。講師謝金は、全体で３万円～５万円を考えており、そこに交通費を含めると、５万円から７万円となるため、１人当たり約１万円程度のご負担をいただきたいと考えております。講師は、現在、文教大学の准教授で、こども家庭審議会、こどもの居場所部会の委員でもあります、青山鉄兵氏への依頼を検討しています。なお、来ていただくことが難しい場合、オンラインでの勉強会も検討したいと考えています。まず、候補日について、一度おさえさせていただきますてよろしいでしょうか。

【「異議なし」との声あり。】

○中村和也委員長

次に、政務活動費等により１人当たり約１万円程度のご負担をいただくことにご異議ありませんか。

【「異議なし」との声あり。】

○中村和也委員長

次に、講師について、こども家庭審議会子どもの居場所部会の委員等に講師を依頼するなどしますが、調整もあるため、講師の選任は正副委員長にご一任いただいてもよろしいでしょうか。

【「異議なし」との声あり。】

○中村和也委員長

それでは、以上についてよろしくお願いいたします。

２．その他を協議題とします。次回の委員会の日程ですが、９月１７日（水）１３時３０分からとさせていただきますと考えています。この日は、事業評価の予備日となっておりますが、午後までかかることはないのではないかと考えるためです。いかがでしょうか。

【「異議なし」との声あり。】

○中村和也委員長

その他について、何かあればお願いします。

【「なし」との声あり。】

○中村和也委員長

ないようですので、以上で、文教厚生委員会を閉会します。

閉会 午前10時53分